

今日はあなたの特別な日



おめでとうって言いながら
みんな笑ってる



ありがとうって言いながら
あなたも笑ってる



ずっと前から想ってること
今日なら照れずに言えるかな



いつも一緒にいてくれてありがとう

あなたのことをすごく大切に想っています



あなたがいてくれてよかった

あなたがこの世に生まれてくれて
本当によかった

あなたは私の生きる力です

だからどうかいつまでも、
そのままのあなたでいてください





この世で一番大切な日

心温まる31の誕生日ストーリー

Heartwarming Birthday Stories



十川 ゆかり

Sogo Yukari

sanctuary books

お誕生日おめでとう



CONTENTS

Heartwarming
Birthday Stories

1	見知らぬおじさん	12
2	ぼくの生まれた日	21
3	想いのリレー	33
4	おばあちゃんの宝物	42
5	パパのカメラ	50
6	初めてのルイ・ヴィトン	58
7	2つのバースデー	66
8	16年の結婚生活	75
9	リクエスト	80
10	暗証番号	89
11	還暦	93
12	オムライス	97
13	幻の手品ショー	105
14	奇跡のボーダー模様	110
15	二人の似顔絵	119
16	遠い日のプレゼント	125

CONTENTS

Heartwarming
Birthday Stories

17	兄がくれた腕時計	130
18	世界共通の想い	138
19	伝えられなかった言葉	144
20	真っ白の予約表	151
21	主役のいない誕生日	158
22	親子のカタチ	164
23	同じ気持ち	169
24	しゃちほこキティ	174
25	家族にとってのプレゼント	180
26	はっぴばーすでーとうゆー	187
27	不器用な思いやり バイト君から店長へ	196
28	不器用な思いやり 店長からバイト君へ	201
29	生まれたての卵	205
30	おばあちゃんのお寿司	213
31	子どもたちからの贈り物	219
	この世で一番大切な日	235



見知らぬおじさん



Strange man

私には妻がいたが、一人娘が1歳と2カ月のときに離婚することになった。酒癖の悪かった私は暴力を振るうこともあり、幼い娘に危害がおよぶことを恐れた妻が子どもを守るために選んだ道だった。

私は自分がしてしまったことを心の底から悔やんでいる。そして今では付き合いといえども酒は一滴も飲まないことにしている。もちろんだからといって「よりを戻してくれ」なんて言うつもりもないし、言える立場でもないことはわかっている。

ただ元妻と娘には本当に幸せになってほしいと思う。その気持ちに嘘はなかった。

離婚するとき、私は妻と2つの約束をした。ひとつは年に一度、娘の誕生日だけは会いに来てほしいということ。もうひとつは、そのときに自分が父親であるという事実を娘には明かさないでほしいということ。

自分が父親だということを言えない。それは私にとってつらい決まり事ではあったが、娘にとってはそれが最良の選択であることもわかっている。年に一度、娘の誕生日を一緒

に祝えるだけでも感謝しないといけない。

それ以来、娘の誕生日にはプレゼントを買い、ふだんは着ないスーツを着て母子に会いにいった。

元妻は私のことを「遠い親戚のおじさん」と紹介した。娘も冗談なのかんなのか私のことを「見知らぬおじさん」と呼んだ。

娘は人見知りだったが、少しずつ打ち解けていって、元妻と3人で近所の公園へ遊びに行くこともできた。まわりから見れば仲睦まじい家族に見えていたかもしれない。

それは私にとって、なにも替えがたいほど幸せな時間だった。これが平凡な日常ならば、どれほど素晴らしいことだろうか。

年に一度のこの日のことを思うだけで、酒を遠ざけることができた。

だが長くは続かなかった。娘が小学校にあがる年のことだ。

例年通り私がスーツを着てプレゼントを持って母子のもとを訪れると、元妻から「もう会いに来るのは最後にしてほしい」と言われた。

そろそろいろんなことを理解してしまう年頃だからと。

それが理由だと言う。

私にはわかっていた。

新しいことがはじまろうとしているのだ。

娘にもやがて一緒に誕生日を祝う同級生ができるだろう。

元妻は、再婚を考えているかもしれない。

そんなところに「見知らぬおじさん」がいてはいけない。

私だけが過去の中にいた。

年に一度、家族のような時間をくり返せば、いつかふたりが私を「お父さん」と呼んでくれる日が来るかもしれないと、そう本気で信じていた私は愚かだった。

どれほど切実に願っても、一度壊れてしまったものは元には戻らない。

これが現実かと思いついた。

「あ、見知らぬおじさんだ！ 今日遊びに行かないの？」

「今日はね、おじさんもう行かなきゃいけないんだ」

「なんだ、さんねん！」

母子にとつてはそれが一番の選択なのだ。

「ごめんね。元気でね」私は力一杯目をつぶり、手を振る幼い娘の姿をまぶたの裏に焼き付けた。

「ばいばい！」

それ以来、母子と会うことはなくなった。

*

だが娘の誕生日だけはどうしても忘れられず、毎年プレゼントだけを贈り続けた。筆箱や本といったささやかな物を、差出人の欄にはなにも書かずに送った。

それを元妻が娘に渡してくれていたかどうかはわからない。ただ「娘の誕生日を祝う」という行為だけが小さな楽しみになっていたのだ。

それも、娘が中学生になる年にはやめようと決めていた。

娘からすれば私は知らないおじさん、こうしてずっとプレゼントが届いても迷惑だろう。娘には新しい未来がある。私も別の道を歩まなければいけない。

ただ娘の幸せだけを願い、英語の辞書を送って最後にすることにした。

それから1カ月ほど経ったある日、私のアパートに郵便物が届いた。

差出人の欄にはなにも書かれていない。

小さな箱を開けてみると、中から出てきたのは水色のネクタイピンとメッセージカード。メッセージカードを開くと、そこには初めて見る可愛らしい文字が並んでいた。

〈いつも素敵な誕生日プレゼントをありがとう。〉

私もお返しをしようと思ったのだけど誕生日がわからなかったので（汗）今日送ることにしました！ 気に入るかなあ……見知らぬ子どもより〉



その瞬間はつとした。
その日は、父の日だった。